

新九郎通信



発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
e-mail: kinoshita@iseji.net

先日小田原映画祭のロケで早朝の城址公園に行きました。6時前だというのに、池の付近はにぎわっていました。ハスの開花のシャッターチャンスを狙うカメラマンたちでした。街なみ再発見展でも見た事のある、この時期ならではの美しい風景でした。

今年も夏祭りの季節がやってきました。ちょうちん祭り、港祭り、花火大会と楽しい夏のイベントで小田原もにぎわいます。新九郎新九郎では夏休み恒例の子どもフェスティバルや戦争と平和を考える講演会があります。暑さと紫外線にめっきり弱くなりましたが、熱中症に気をつけやはり夏には夏を楽しみたいものです。



新九郎 8月の展覧会のご案内

会 期	展 覧 会 名	見 ど こ ろ
7/28(水)-8/2(月)	VISION 2010	今という時代を8人の現代美術作家が、優れた感性で表現します。
8/3(火) ワークショップ	夏休みこどもフェスティバル	ペーパーしんでエコ工作 小学生低学年 参加費 300円
8/4(水) ワークショップ	夏休みこどもフェスティバル	くもんのめいろかみ工作で遊ぼう 2才〜6才 参加費 300円
8/5(木) ワークショップ	夏休みこどもフェスティバル	みんなで「100かいだてのいえ」をつくろう！ 3才〜小学生低学年 参加費 300円
8/6(金) ワークショップ	夏休みこどもフェスティバル	空箱でつくるスタントカー！ 4才〜小学生中学年 参加費 300円
8/14(土)-8/15(日)	「戦争」と「平和」を考える会「写真展」	8/14 シンポジウム 13:30-16:00
8/18(水)-8/23(月)	第3回ありと展 筆に任せて	仏画・日本画 時宗開祖一遍上人聖絵より、湯河原歩く会(旅先の絵) 書 阿弥陀・短歌・他
8/29(日) イベント	ウクレレバンドがやって来る！！	長谷川マコト&スーパーウクレレバンド 料金 1000円(飲み物・おつまみ付き)

近隣・友の会会員の展覧会情報

西ゆり会美術展 ハッスル会美術展 きょうび展 長谷川昌代展 ・Blend-2(川城夏未・吉田潤・佐々木和香子) 高橋雅和展 花と魚の遊々展 宮本紅魚・小松加子 彫刻・人形・篆刻三人展 フォトサークル夢月例入賞作品展 第4回田辺幸子欧風刺繍教室展	8月4日(水)〜8月9日(月) 8月12日(木)〜8月16日(月) 8月19日(木)〜23日(月) 8月1日(日)〜30日(月)火定休 8月8日(日)〜29日(日) 7月1日(木)〜8月31日(火) 〜8月29日(日)月〜木休 8月19日(木)〜23日(月) 8月1日(日)〜31日(火) 8月4日(水)〜9日(月)	飛鳥画廊(0465-24-2411) アオキ画廊(0465-23-5624) ツノダ画廊(0465-22-4250) はげ八鯨 (0465-22-0945) 元麻布ギャラリーカフェ茅ヶ崎(0467-88-1596) ナヤカフェギャラリー(0460-82-1259)水4木休 ギャラリーシュル(熱海 0557-81-4281) うつわ菜の花(0465-24-7020) フジカラー夢工房 MJC(0465-37-0807) ロビンソン小田原展 4F ギャラリー(0465-49-7111)
---	---	--

ようこそ平塚美術館

平塚美術館学芸員 勝山 滋

縁起物に「鯉の滝登り」がある。本作は1992年作、捕鯨問題で貴重となった鯉はさしずめ現代の縁起物ということか。横で本家の鯉登りが目を丸くしている。ポップななかに潜む風刺の精神。

この作者、田口雅巳さんが亡くなった。江ノ電風景などで有名だが、本領は洒落の効いた浮世絵師としての諸作にあった。江戸っ子で湘南在住、広い交友から湘南朝日に連載「湘南の画家」を残した。病气から快復した折りには黒のジャケットの裏地の鮮烈な赤に作家魂を感じ、快哉を叫んだものだ。美術館で紹介すべき逸材であり、残念でならない。



新九郎 真夏の夜の祭典

ウクレレバンドがやって来る！

長谷川マコト&

スーパーウクレレバンド



2010年8月29日(日)18:30-20:30
ギャラリー新九郎(伊勢治書店 3F)
料金 1000円(飲み物・おつまみ付)
前売りチケット販売中！
伊勢治書店 0465-22-1366
1F ご予約カウンター

黒崎俊雄展によせて

住谷重光

平塚美術館では、プラティスラヴァ世界絵本原画展と同時開催で、8月29日まで黒崎俊雄展が開催されている。会場全体が自由でのびのびと、色彩と線が空間を泳ぎ回っている。僕は特に、新聞紙をつなぎあわせた上に描いたドゥローイングと、猫を描いた百枚程のデッサンに釘づけになった。会場空間に呼吸している様な、生きた絵画がそこにあった。初期の頃の、対象を描くことを止め、線を引くという行為だけの、自分にとっての絵画をさがす旅のような画面とは、まるで逆の表現だ。両極のギャップにとまどい、不思議な思いがした。



その飛躍のひとつのきっかけが、オープニング・パーティーでの、野見山暁治先生のスピーチにあった。「黒崎君は、僕の教室の生徒でした。絵の方は実はあまり覚えていません。記憶にあるのは彼はもりもりと食べる大食漢で、山岳部に入っていたので、高い所は平気な人だということです。当時僕が九州に壁画の仕事があったので、助手にぴったりだと思い彼を連れていきました。下図を作るのに新聞紙を何十枚もつなげて、その上にデッサンをしました。今回この会場に来て、新聞紙の上にドゥローイングをしている作品を見て、おおっ、やっとなるやっとなると思いました。彼の仕事はずっと見ていますが、数年前から急に花咲いた様な気がしています。これから体も大切に、頑張ってください。」という主旨を話されました。

僕は、40年近く前から黒崎さんを知っています。芸大の学生だった頃、黒崎さんは助手をされ、野見山先生は教授をされていました。当時にタイムスリップした様で妙な感じがしました。学生の頃黒崎さんの引越しの手伝いをした事もあり、それを話すと「覚えているよ、忘れはしないよ。」といわれた。

黒崎さんの仕事は、自我を主張していくのではなく、消去して消去していく仕事だ。限りなく無に近づいて、そこから泉のごとくエネルギーが沸きあがっているのが、現在の仕事なのだろうと思う。初期の禁欲的で哲学的な仕事と、今の豊かで花咲いた様な仕事は地続きなのだ。表現の方法は全く別だが、野見山先生と共通な質を感じる。晩年になればなる程、良い仕事をする作家の共通項に気づいた事がある。それは「精神の自由と他者への思いやり」ということだ。その人の生きる姿勢が大切という事だが、そこに品性が生まれてくるのだと思う。



作家は本当に自分のやりたい事を楽しんでやる事が大切で、それでないと見る人は感動しないし、また見る人が自由に入って遊べる余地がないと、芸術として成り立っていかないと思う。芸術は究極にはコミュニケーションの問題になっていくと思うから。

今回の展覧会では子供との共同制作もありおもしろい意味があると思う。今までの美術関係者だけの閉じた世界だけで成り立つ美術から、社会性を持った開かれたものへと変化していく時代に入っているのだと思う。日本人は全体に美意識が高いし、展覧会の入場者数も印象派などは高い。そのベクトルを少し変える努力を、作家も企画者も見ると、バランスや豊かさをとり戻せる気がする。

作家も社会に作品をさらしながら、存在意味を確かめつつ、一方で出来るだけ孤独で自由に全く新しい境地を切り開いていくことが、これからも求められるのだと思う。

ugougo 黒崎俊雄展 2010年6月26日～8月29日 平塚美術館

本荘赴の最高傑作「足和田村」(60号縦長変形) 発見



この絵は、本荘赴が、75才の時1981年(昭和56年)の作品で、前年55年の「丹沢湖の朝」、58年の「湖畔早 晨」と並ぶ、最高傑作です。裏書きに、歌人でありました千代子夫人の「足和田讃歌」と題する4首の筆書きがあることから判るように、生涯大切にされていたものです。今回ギャラリー新九郎の木下さんをお誘いし、所有者であるIさん宅で数年ぶりの再会を果たすことができました。本荘の最高傑作が、誰の目にも触れることなく埋もれていることを心苦しく思い続けてきました折りに、将来の小田原美術館の話と結びつくことができればすばらしいことなのではないかという思いからでした。ちなみに、「丹沢湖の朝」は秦野の丘の中腹にある東公民館の2階の踊り場にあり、絵の前

に、多数の折りたたみミスが立てかけられており、とても絵を鑑賞できる環境ではありません。「湖畔早 晨」も、大磯図書館の二階の誰も観ることができない吹き上げの高い場所にかかっており、反射光で見えにくいのです。そして今回の絵は個人の倉庫内で誰の目にも触れることもないという、非常に数奇な絵連なのです。本荘赴ほど、品格ある重厚さとモダンな色彩が調和した画家を知りません。常に、どんな心境で書いたかを問いながら、自身に厳しく絵を描いてこれ、さらに、自分は描くのではなく、描かされていると言っておられました。岡鹿之助が、最後まで本荘赴を、春陽会会員推挙に反対した、というエピソードも残っています。17年前の「楽楽展」で、故下田国三さんから、「君の絵は、本荘赴に似たところがある。画集を貸してあげる。」ということから始まった、私の本荘絵画への傾倒、追求は、さらに深くなっています。

らくらく展会員 中井一郎

(らくらく展は7月ギャラリー新九郎にて開催されました)

7月のこと

第8回西さがみ街なみ・ふる里再発見!展が盛況のうちに無事終了しました。作品点数277点、推定入場者数2500人、点数・入場者数とも昨年よりふえ、少しづつですが着実に輪が広がってきている実感があります。作品のレベルも向上していると感じました。「7月は街なみに出品する」と準備された作品は、絵ががみ・絵画・写真のジャンルを超え、美しく表現されていました。素直で丁寧な作品から皆様の感動が伝わってきました。毎年親子で出品される方、体調が悪く一度諦めかけながら何とか出品くださった方、友人・知人を誘って参加された方、グループでの参加など今年も多くの方の参加がありました。審査もなく絵のサイズも小さいのでどなたにも気軽に参加いただけた、初出品の方が増えていることも嬉しい事です。

Kさんは3年前に国府津の街なみを描いたのをキッカケに、毎年2点ずつ国府津の街を描いています。シリーズ化された作品を多くの方が楽しみにされています。街なかのミュージックストリートをモチーフにした絵を見られた主催者の方が大変感激したという話もありました。今年のポスターに採用された常盤木門の絵の作者の方が、今年2月に逝去されました。回復されなかったのは残念なことでしたが、病床でポスターになったご自身の絵をご覧になり喜んでいただけたことが何よりだったと思います。ボランティアで会場当番に入っていた方方も増えました。お蔭さまで暑い中來場下さった方に冷たいお茶で一息入れていただきました。また各会場では、絵や写真を囲み、「こんな素敵な所があったんですね」と文字通り再発見された場所を通して話が咲いていました。

中心商店街・地域の活性化を目指して始められた展覧会ですが、8年目にしてようやく当初の目的である、商店街への流入人口の増加、出品者と鑑賞者の交流が図られてきたように思います。まだまだ十分ではありませんが、絵を描く楽しみが増え、観る楽しみが増え、会場でのふれあいが生まれることが、人を元気にし地域の活性化につながるのだと思います。来年も皆様のご参加ご支援をよろしくお願ひします。杏